|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| **教育研究業績書** | | | | | | |
| 2016**年**4**月10日**  **氏名**服部　圭郎印 | | | | | | |
| **著書・学術論文等の名称 1)** | **単著・共著の別 2)** | **発行または発表の年月** | **発行所・発表雑誌（および巻・号）等の名称** | **編著・著者名等（共著・共同執筆の場合のみ記入）** | **該当頁数 3)** | **主要業績の概要　4)** |
| 1. 著書   ドイツ：縮小時代の都市デザイン | 単著 | 2016.3 | 学芸出版社 |  | 総240頁 | 産業の衰退と失業率の増加、大都市・郊外への流出による人口減少は、ドイツにおいても空き家の増加や都市環境の悪化など、深刻な課題をもたらした。そんな現実を受け止め、建物の保全改修と減築・撤去、アイデンティティの再構築、都市のコンパクト化など縮小を前提とした政策で局面を切り抜けたドイツに学ぶべき指針を探る。 |
| Tokyo's "Living" Shopping Streets: The Paradox of Globalized Authenticity | 共著 | 2015.7 | Routledge  “Global Cities, Local Streets” |  | 170-194頁 | 下北沢がなぜ「東京のグリニッチ・ビレッジ」「東京のカムデンヤード」と海外から形容されるのか。その特性を探るために、商店街のテナント構成、空間特性、オーナーの経営意識などを現地踏査し、分析してまとめた。 |
| ブラジルの環境都市を創った日本人: 中村ひとし物語 | 単著 | 2014.3 | 未來社 |  | 総257頁 | ブラジルのクリチバ市で環境局長、さらにパラナ州の環境大臣を務めた兵庫県明石市出身の日系人の半生をまとめた単行本。ランドスケープ・アーキテクトとしても動物園・植物園を含めて１００以上、その設計に携わっている。その空間デザインへの思想などを解説している。 |
| 若者のためのまちづくり | 単著 | 2013.8 | 岩波ジュニア新書 |  | 総240頁 | 日本の都市計画、まちづくりでは若者は対象にされない。若者にとって楽しくないまちづくりを推進していることが、このような若者が大人になってつまらないまちづくりをしてしまうという負の連鎖に日本は陥ってしまっている。このような仮説に立ち、本書では、現状の若者無視のまちづくりがどのような問題をもたらし、若者は自らが問題提起をしないと、いつまでも日本の都市、街がよくないことを訴える。 |
| 道路整備事業の大罪 | 単著 | 2009.8 | 洋泉社 |  | 総221頁 | これまでの日本の道路整備は、田中角榮の「日本列島改造論」に象徴されるように、それが地方を豊かにし活性化するとの理由で推進されてきた。本研究では、この前提に対して疑義を呈し、「ストロー効果」、「限界集落」、「自動車代による家計圧迫」などの視点から、道路整備がかえって人口流出や地域経済の衰退を招きうることを論じている。また、ジェイン・ジェイコブスなどの先人の研究成果を踏まえつつ、道路がもたらす「コミュニティの空間的分断と崩壊」、「子供の遊び空間の喪失」、「商店の喪失に伴う生活環境の悪化」などの負の側面を多角的に分析している。さらに世界的な脱自動車・脱道路の潮流とその背景にある政策的意図を整理、紹介し、道路政治に公共事業予算を偏在させてきた日本の政策の異質さ、そしてそれが現在社会に及ぼしている問題点を指摘している。 |
| 衰退を克服したアメリカ中小都市のまちづくり | 単著 | 2007.12 | 学芸出版社 |  | 総207 頁 | モータリゼーションによる生活圏の広域化、グローバリゼーションによる画一化により日本の中小都市はいま危機的状況にある。同様の課題を抱えながらも、将来ビジョンをもって市民が主体的に関わることで、小さいながらも質の高い生活環境を実現したアメリカの5つの都市事例から、地域独自の生活の質を実現する都市戦略を分析、整理する。 |
| 地方を殺すな | 共著 | 2007.11 | 洋泉社 | 三浦展 | 「ファスト風土先進国・アメリカ」  (104-109頁、  214-221頁) | 「ファスト風土」という切り口を用いて、アメリカの郊外が抱える問題、また反ウォルマートの現地の動きなどを取材レポートした。 |
| 地球環境時代のまちづくり | 共著 | 2007.10 | 丸善株式会社 | (社)日本建築学会 | 総4 頁 | 「世界のエコロジカルなまちづくり」という章でブラジルの都市クリチバの政策概要を整理した。 |
| 下流同盟 | 共著 | 2006.12 | 朝日新書 | 三浦展 | 第3章「ファスト風土化し下流化する地方」  (98-119頁)  第４章「嫌われるウォルマート」  (122-151頁) | 第３章では群馬県の太田市の駅前地区が区画整理された後、ファスト風土化している実態を、現地調査を踏まえて整理している。第４章はアメリカの巨大な小売業者であるウォルマートが出店した地域における問題点を、アメリカへの取材調査を踏まえて検証している。 |
| 脱ファスト風土宣言 | 共著 | 2006.4 | 洋泉社 | 三浦展 | 第１章「日本の商店街は世界のお手本」  (37-61頁) | 日本の商店街を世界の都市論のディスコースを踏まえて検証すると、評価すべき点が数多くある。日本人の研究者が見落としがちな、商店街の社会的価値を検証して、その有用性を説いている。 |
| サステイナブルな未来をデザインする知恵 | 単著 | 2006.4 | 鹿島出版会 |  | 総304頁 | 本書は、社会思想、環境運動、著述、経済学、地理学、社会学といった分野において、人間的に魅力ある社会を実現させようと、独自の明晰さと感性を持って、パラダイム転換を唱えている識者たちの思想から、現代社会が直面している諸問題を浮き彫りにする。 |
| 人間都市クリチバ | 単著 | 2004.4 | 学芸出版社 |  | 総198 頁 | 今、クリチバ市民の98％が「街に誇りを感じる」と答えている。お金も技術もないなかで、なぜ都市づくりが出来たのか。その秘訣は「都市は人間のためにあるべき」という強い信念のもと、都市計画への強い意志を持ち続けたことにある。ブラジルの都市が実現した都市計画の総合性、戦略性、そして実行力を分かりやすく紹介する。 |
| 都市計画国際用語辞典 | 共著 | 2003.11 | 丸善株式会社 | （株）日本都市計画学会監修  都市計画国際用語研究会　編 | 「キーワード集」  K9-K10, K25-K27, K35,K42,K62,K78,K97, K110,K119  「用語集」  都市デザイン、サステイナブル・デザインの用語を中心に担当 | 都市計画の専門家や実務者が内外の用語の定義・意味を容易に理解できる目的で編集された用語辞典。最新の都市計画用語、重要な都市計画の概念などについてその定義・背景・関連用語などを解説した「キーワード集」、英米語を中心とした都市計画用語をアルファベット順に配列し、その訳語と必要に応じて短い説明を付した「用語集」、都市計画用語辞書としても使えるように、日本語から国際用語を逆引きできるようにした「和文索引」で構成。 |
| 『2100年未来の街への旅—自然循環型社会とは何か?』（第２章第７節「ランドスケープ」担当） | 共著 | 2002.10 | 学研 | サステイナブル研究会 | 58-61頁（総152頁） | 現在の我が国のランドスケープは消費主義によって、地域性を風化させられ、画一的になってしまっている、という問題点を指摘。将来は、それぞれの地域の風土を反映させたランドスケープをつくるために、より生態系などに配慮した考えが求められることを主張している。 |
| サステイナブル建築最前線（第３章「市民参加とサステイナブル・デザイン」、「アフォーダブル・ハウジング」、第４章「南米のエコ・シティクリチバ」、「消費が形成するランドスケープ」担当） | 共著 | 2000.5 | 日本建築化協会+ビオシティ | 監修：岩村和夫 | 188-195頁、196-203頁、  286-297頁、  298-305頁  (総329頁) | 「市民参加とサスティナブル・デザイン」、「アフォーダブル・シティ「クリチバ」」、「「消費」が形成するランドスケープ」の取材記事の単行本化。 |
| 1. 学術論文   The Image Study of Ruhr-Region | 単著 | 2015.12 | 『明治学院大学産業経済研究所年報』（明治学院大学）32号 |  | 1-14頁 | ノルドライン・ヴェストファーレン州のルール地方に対して、ドルトムント大学生がどのようなイメージを有しているかイメージ・マップ調査を実施して検証した。 |
| 旧東ドイツの縮小都市における、集合住宅の撤去政策の都市計画的プロセスの整理、および課題・成果の考察　–　アイゼンヒュッテンシュタットを事例として **- ＜査読付き＞** | 単著 | 2015.10 | 公益社団法人日本都市計画学会  （都市計画論文集Vol 50 No.3） |  | 816-823頁 | ドイツ最初の社会主義計画都市であるアイゼンヒュッテンシュタット市を対象に、その縮小政策の概要を調べ、その課題と成果を現地取材、統計資料、文献調査などから分析、整理した。 |
| 縮小時代における都市と地域の未来展望 | 単著 | 2015.9 | 思想、岩波書店  （no.1097） |  | 103-123頁 | 人口が縮小していく中、都市と地域はどのような将来を構想していくべきなのか。人口縮小を日本に先んじて経験をした旧東ドイツの状況、さらにはそれに対応した政策を現地への取材調査などを踏まえて整理した。 |
| オリンピックと都市開発 | 単著 | 2015.4 | 『電気通信』  一般社団法人 電気通信協会、 |  | 18-21頁 | これまでのオリンピック開催都市における都市開発への影響を分析し、オリンピックを目的ではなく都市開発の手段として位置づけ、長期都市計画と連動させなくては、その開発効果があまり期待出来ないことを検証した。 |
| クリチバ：レルネル市長の都市戦略 | 単著 | 2015.4 | 『地域開発』（日本地域開発センター）、2015年4・5月号 通巻607号 |  | 16-20頁 | 元クリチバ市長であり、元世界建築家協会会長であるジャイメ・レルネル氏の提案した「都市の鍼治療」という都市戦略に関して、彼との対話、そして彼の著書『都市の鍼治療』などから、その方法論を解説した。 |
| 縮小都市における都市と地域の未来展望 | 単著 | 2015.1 | 明治学院大学『経済研究』149号 |  | 1-14頁 | 日本の多くの都市が縮小していく中、その縮小の特徴・傾向をマクロの視点から整理した。そして、それらは「自然減が主要因であること」「広範囲においてみられること」「地域格差が顕著であること」と論じた。 |
| ブラジリアの都市計画が失敗した原因分析のための情報整理 | 単著 | 2014.12 | 『明治学院大学産業経済研究所年報』（明治学院大学）31号 |  | 93-144頁 | ブラジリアはミクロでは最も都市計画がされた都市であるが、広域都市圏でみた場合、最も都市計画がされていない都市である。本研究は、ブラジリアの広域都市を分析するための基礎情報として、その概要を整理したものである。 |
| 都市デザインの力でチャールストン市を再生した市長 | 単著 | 2013.2 | 建築雑誌  (Vol.128/No.1641) |  | 35頁 | 全米で最初の歴史保全ゾーニングを政策として実施したチャールストン市において１０期（40年間）市長をしているジョセフ・ライリーの功績について解説をした。 |
| Shimokitazawa- The Study of Organically Developed Shopping Districts in Tokyo | 単著 | 2012.12 | 明治学院大学産業経済研究所　研究所年報　第29号 |  | 1-34頁 | This paper examines the characteristics of Shimokitazawa mostly from spatial perspectives, especially spatial use. The research was done mostly by field survey. It has found out that there are 1200 shops in Shimokitazawa Area. |
| ハンブルクの最新都市開発事情 | 単著 | 2011.11 | 月刊『区画整理』11月号 |  | 50-55頁 | ハンブルクの最新の都市計画事情を、同市の都市計画部長へのヒアリングをもとに整理した。 |
| ザクセン・アンハルト州の縮小政策に関する研究 | 単著 | 2010.12 | 明治学院大学産業経済研究所　研究所年報　第27号 |  | 64-87頁 | 旧東ドイツのザクセン・アンハルト州で実践された国際建設展の縮小政策プログラムの特徴を幾つかの事例研究を踏まえて整理した。 |
| 商業地としてのシモキタ、魅力の解析 | 単著 | 2010.12 | 『city & life』 no.98 |  | 14-16頁 | 下北沢の商業地はなぜ魅力があるのか。その都市空間的特徴から、その魅力の要因を分析、考察した。 |
| 都市計画における「生物多様性」の意義 | 単著 | 2010.10 | 都市計画  社団法人都市計画学会 |  | 46-49頁  総4頁 | 生物多様性をいかに都市計画に活かすのか。オランダのティルブルクといった先進的な事例の施策を紹介しつつ、その意義、課題等をまとめた。 |
| Aging and Shrinking Villages in Japan, its reality and Relavance to Planning | 単著 | 2010.7 | Association of European School of Planning |  | 総18頁 | This paper examines the shrinking village of Japan. It surveyed the situation in Nanmoku-mura Village, one of the most aging municipalities in Japan. The paper concluded that the market economy will not help sustain the existence of the village, and suggested the need for governmental intervention if it wants to save the community of Nanmoku-mura. |
| The Study of the Visual Value of Open Space on a University Campus  **- ＜査読付き＞** | 共同執筆 | 2010.6 | Environmental Design Research Association  (refereed) | 中公俊 | 82-89頁 | 明治学院大学の正門に隣接してあるオープン・スペースが潜在的に抱く価値を学生、職員、近隣住民を対象とした意識調査ＳＤ法を援用して検証、考察したものである。 |
| デュッセルドルフの都市計画事情 | 単著 | 2010.3 | 月刊『区画整理』3月号 |  | 43-50頁 | デュッセルドルフの最新の都市計画事情を、同市の都市計画部長へのヒアリングをもとに整理した。 |
| シュヴェリーン（ドイツ）の連邦庭園博覧会の現地報告 | 単著 | 2010.3 | Urban Green Tech |  | 44-47頁 | ドイツの都市開発手法の一つである連邦庭園博覧会に関して、シュヴェリーンで開催された同博覧会を訪れ、その状況をレポートし、その都市計画的位置づけ等を整理した。 |
| ジェイコブス的「人間都市」としての商店街 | 単著 | 2007.3 | city & life no.83 |  | 34-39頁 | 日本の商店街を世界の都市論のディスコースを踏まえて検証すると、評価すべき点が数多くある。日本人の研究者が見落としがちな、商店街の社会的価値を検証して、その有用性を説いている。 |
| 旧東ドイツの都市の縮小現象に関する研究 | 単著 | 2006.12 | 研究所年報第23号　明治学院大学経済学会 |  | 31-52頁 | 世界でも最も人口減少率が高い旧東ドイツ地区、その中でもこの１５年間での人口減少率が際だつアイゼンヒュッテンシュタット市の都市減少動向の実態を調査し、また、それに対応した同市の縮小政策、そしてその政策を遂行するうえでの課題について現地の統計、文献調査、取材調査を踏まえて整理した。 |
| 人口縮小時代のまちづくり | 単著 | 2006.12 | KOMEI |  | 32-38頁 | 旧東ドイツにおける人口縮小都市の実態、そしてその課題を整理して、またそのためにこれらの都市が策定した対策について論じた。 |
| アメリカ合衆国における広域地域計画とその社会インパクトの分析に関する研究 | 共同執筆 | 2005.12 | 研究所年報第22号　明治学院大学経済学会 | 原後雄太 | 37-59頁 | アメリカの広域地域計画について、それをしっかりと策定することで、いかに多くの社会的課題（公共交通問題、環境問題等）が解決できるかについて論じるとともに、そのような計画を策定するうえでは自治体間の協働が必要であることを述べた。 |
| コンパクト・シティ、「賢い縮小」の必要性 | 単著 | 2005.12 | city & life no.78 |  | 34-39頁 | コンパクト・シティのメリットを論じ、人口が縮小していく中、都市の人口密度を維持させたまま、いかに賢く縮小していくかが重要であるかを論じた。 |
| 「新地域主義」の背景・内容に関する研究 | 単著 | 2004.12 | 経済研究　第131号　明治学院大学経済学会 |  | 33-51頁 | アメリカにおいて９０年代から注目されてきたニュー・リージョナリズム（新地域主義）の考え方について整理した。 |
| 「パリのニュータウンの歩みと将来への展望」 | 単著 | 2002.8 | 日仏工業技術 |  | 18-25頁 | パリのニュータウンの計画策定から開発、街として機能し始めた現在間での経緯を分析し、その歴史的意義、課題を整理した。そして、我が国のニュータウンとの比較考察もしている。ニュータウンという20世紀の発明がこれからどのような道を歩むべきか、その展望等も示している。 |
| 「都市と緑地との共生」 | 単著 | 2001.9 | 都市緑化技術42号 |  | 総4頁 | 新しい世紀において都市が必要とする、社会インフラとしての「緑」に関して、アーバン・ヒートアイランドへの対処方として、生態系回廊として、都市の風土を象徴するランドスケープとして、といった視点から整理を行った。 |
| 「環境都市へのパラダイム転換」 | 単著 | 2001.4 | 建築設備士2001.4号 |  | 45-49頁 | 20世紀型の都市は、急激な発展をした結果、その都市を支持するのに必要とする周辺環境への負荷を過大なものとし、袋小路に陥ってしまっている。これを打破するためには、20世紀型の都市の構造、システムを大幅に変革し、都市をサステイナブルなものに転換しなくてはならない、との考えから、そのアルタナティブとしての「環境都市」というコンセプトを提示した。技術面だけでなく、社会面で変革が必要であることを述べている。 |
| インドの上水政策の分析 | 単著 | 2001.4 | 三菱総合研究所　所報No.38 |  | 総24頁 | インドにおける上水政策の課題、改善策を国際協力という観点から分析した。手法は行政を主体とした取材調査と文献調査。整理された課題は、政策面としては「価格政策に関する課題」「分権化政策に関する課題」、組織・体制面としては「資金面の課題」「自治体の維持管理業務の遂行能力の不足」、それ以外としては「水の商品化への心理的抵抗」「水需要に対しての絶対的な不足」「水質汚染」「電力など基盤インフラストラクチャーの不備」であった。 |
| 「21世紀未来都市-環境先進都市」 | 単著 | 2001.1 | 土木学会誌　2001.1号 |  | 30-32頁 | 世界の環境先進都市を「都市の環境負荷を低減させる」「資源循環を促す」「生態系を保全し、自然と共生する」「経済・社会システムの自立化・持続化を図る」といった４つの視点から分類して、その概要を整理した。 |
| 「南北アメリカにみる環境共生都市事情」 | 単著 | 2000.11 | 日経エコ21 2000.11月号 |  | 79-89頁 | 南北アメリカの環境共生都市の事例を分析することによって、どのような方法論をもって都市の環境への負荷を低減できるかに関して論じている。ブラジルのクリチバ、アメリカのヴィレッジ・ホームズやポートランドなどの環境共生都市やコミュニティを紹介した。 |
| 「イギリスにおける中心市街地活性化の取り組み」 | 単著 | 1999.9 | 食流機構レポートVol.4 No.1 |  | 総11頁 | イギリスの中心市街地が1980年代以降、直面してきた課題を整理し、そのための同国の対応策を検証した。そして、その対応策が我が国にも応用できるかを分析し、我が国においてもイギリスのような郊外開発規制が中心市街地活性化に必要であると提言している。 |
| "Study of the Spatial Image of the City of Kuala Lumpur"  **- ＜査読付き＞** | 単著 | 1999.6 | Environmental Design Research Association  （第30巻） |  | 95-99頁 | 国際学会である環境デザイン研究学会での発表論文。クアラルンプールの都市構造を、ケビン・リンチのイメージ・マップを市民に描かせることで分析。市民は曲線の都市構造を格子状でイメージしている場合が多いことや、都市における方向感覚をしっかり有していないことを明らかにした。 |
| 「アメリカの小売店舗立地政策と中心市街地」 | 単著 | 1999.1 | 食流機構レポートVol.3 No.2 |  | 総5頁 | アメリカが今世紀後半に経験したダイナミックな流通革新と、その結果衰退してきた中心市街地の過程を整理し、その対応策として街作りという観点から行われてきているアメリカの小売店舗立地政策を検証した。 |
| 「地域経済活性化策としてのサイエンス・パークの有効性の検証」 | 共同執筆 | 1998.1 | 三菱総合研究所　所報No.32 | 伊藤美保 | 総24頁 | 世界の代表的なサイエンス・パークの成果を検証することによって、地域経済活性化策としての有効性を考察した。その結果、サイエンス・パークは進出企業数、雇用数などでみるとスケールが小さく、一般的にはあまり経済効果が明らかになった。また、情報産業を興すためには、いつくかの条件を満たさなくてはならず、地域経済活性化の万能薬にはなりえないと考察した。 |
| The Study of Neighborhood Commercial Streets in San Francisco | 単著 | 1996.5 | University of California at Berkeley |  | 総226頁 | カリフォルニア大学バークレイ校環境デザイン学部の修士論文 |
| 「大都市圏（メトロポリス）における成長管理政策」 | 単著 | 1994.9 | 三菱総合研究所　所報No.26 |  | 総20頁 | 今でこそ、日本でも有名に成ったポートランドの成長管理政策の策定過程、その成果と克服すべき問題点を分析、整理した。その結果を踏まえて、我が国に類似した政策を導入するうえでの問題点も指摘した。 |
| ３．翻訳  世界が賞賛した日本の町の秘密  （チェスター・リーブス著） | 単訳 | 2011.12 | 洋泉社 |  | 総221頁 | 日本人は海外にいろいろな知恵を求めてきたが、実は外国人の視点からみると日本の生活にこそ、多くの環境問題を解決するヒントが隠されている、ということを述べた本を翻訳した。 |
| オープンスペースを魅力的にする  （プロジェクト・フォア・パブリック・スペース著） | 共訳 | 2005.11 | 学芸出版社 | 加藤源監訳  鈴木俊治  加藤潤 | 31-51頁 | 人々に広く受け入れられる公共空間をどうしたらつくれるのか。既存の使われていない公共空間を再生した事例等を紹介している実践的なハンドブック的な本。私は４つほどの事例を翻訳した。 |
| 都市の鍼治療  （ジャイメ・レルネル著） | 共同翻訳 | 2005.8 | 丸善 | 中村ひとし | 総124頁 | 「都市の鍼治療」とは、お金がなくても知恵を使い、その都市の課題を解消できるような「ツボ」を見事に突いて状況を大きく改善させるような都市政策である。本書は、この「都市の鍼治療」の提唱者であり、クリチバ元市長が著したものを訳したものである。 |
| ４．その他  歴史都市として新しいアイデンティティづくりに取り組むプラハ | 単著 | 2016.1 | FORE（社団法人不動産協会） |  | 10-11頁 | 世界遺産都市であるプラハは同時に、一国の首都でもある。経済的な開発を促しつつ、いかに歴史的街並を保全しているのか、またはそのアイデンティティを強化しているのか。その試みを紹介している。 |
| 自転車利用で持続可能な都市へ –コペンハーゲンの戦略 | 単著 | 2015.12 | アプローチ2015冬号、竹中工務店 |  | 4-5頁 | 世界一の自転車都市といわれるコペンハーゲンの自転車利用促進政策の実態、そしてその政策の背景にある理念等を整理した。 |
| 魚らんラボラトリー（魚らんラボ）での活動報告 | 単著 | 2015.5 | 『大学時報』　第362号 |  |  | 筆者のゼミでの活動を紹介したもの。現地でのフィールドワークを中心とした教育方法の報告。 |
| 工業都市から文化都市へと生まれ変わったエッセン | 単著 | 2014.3 | FORE（社団法人不動産協会） |  | 10-11頁 | ルール工業地帯の中核都市であるエッセンが、いかに工業都市から欧州文化都市に指定されるように変身できたのかを論じている。 |
| 旧東ドイツの縮小都市の研究　–ブランデンブルク州コットブス市を事例として」 | 単著 | 2013.1 | 明治学院大学『経済研究』146号 |  | 127-166頁 | ブランデンブルク州のコットブス市の縮小状況の現況と、それによって生じている課題、さらにはどのような政策で対応しているのかを整理した。 |
| 都市計画を統べる土地利用計画（地図の中の風景） | 単著 | 2012.12 | 都市計画（Vol.61/No.６） |  | 1頁 | クリチバの土地利用計画は、すべての都市計画を統べるものである。土地利用計画図を示しながら、その重要性を論じた。 |
| デンマークのアルバーツラントの環境都市政策に関する調査 | 単著 | 2011.2 | 明治学院大学『経済研究』第144号 |  | 97-108頁 | デンマークのコペンハーゲンの郊外都市であるアルバーツラントは自動車道路よりも自転車専用道路の方が延長距離が長い自転車都市である。その政策の取り組みや効果、課題について整理した。 |
| ロスアンジェルス（脱自動車を模索する都市） | 単著 | 2010.11 | FORE（社団法人不動産協会） |  | 総2頁 | 自動車都市であるロスアンジェルスも、自動車以外の交通手段でのモビリティを向上させつつある。そのようなロスアンジェルスの取り組みを紹介した。 |
| アメリカの都市における地域復興の取り組み | 単著 | 2010.10 | 地方自治職員研修 |  | 総3頁 | アメリカの地域興しに成功した自治体を概観すると、その都市の存在基盤は何かということを、経済面だけでなく歴史などのアイデンティティ、そしてコミュニティ性（パブリック性）に求めていることが共通している。我が国の自治体も地域興しをするうえで、この点は大いに参考になるのではないかと考察する。 |
| IBAの伝統と現在 | 単著 | 2010.9 | approach  竹中工務店 |  | 4-10頁 | ドイツの伝統的な都市開発手法である国際建設展について、これまでの歩みと最新のIBAフルスト・プックラーラントの取り組みについて整理した。 |
| 人口減少時代の「地域力」 | 単著 | 2010.4 | 週間エコノミスト2010.4.13 |  | 76-79頁 | 人口減少地域における統計解析をし、人口減少の大小は一次産業従事者の割合の多さ（多いほど人口減少率は低い）にあることを分析し、論じた。 |
| シュヴェリーン（ドイツ）の連邦庭園博覧会の現地報告 | 単著 | 2010.3 | Urban Green Tech |  | 総4頁 | ドイツの都市開発手法の一つである連邦庭園博覧会に関して、シュヴェリーンで開催された同博覧会を訪れ、その状況をレポートし、その都市計画的位置づけ等を整理した。 |
| 大胆な新陳代謝が肯定される都市・ベルリン | 単著 | 2010.3 | FORE（社団法人不動産協会） |  | 総2頁 | 東西ドイツ統一後、ベルリンの都市開発の多くは資金不足から修正を余儀なくされたが、近年はボトムアップの面白いまちづくりの展開がみられている。本論では、それらを紹介している。 |
| ＥＵの環境ビジョン・都市と住宅のゼロエミ化へのアプローチ | 単著 | 2010.1 | FORE（社団法人不動産協会） |  | 総2頁 | EUにおける都市、そして建物レベルでのゼロエミッションの施策をまとめた。 |
| ドイツの自動車不要コミュニティ | 単著 | 2009.10 | ビオシティ no.43 |  | 72-75頁 | ドイツの新しい集合住宅の設計コンセプトである「オートフライ（自動車不要）」コミュニティに関して、ケルンやブレーメン、フライブルクの事例調査を踏まえて、その意義・課題等を明らかにした。 |
| ブラジル・クリチバ 豊かな公共空間を生みだした市民の知恵と参加意識 | 単著 | 2008.4 | をちこち |  | 53-57頁 | クリチバは豊かな公共空間を生み出してきたが、それを可能にしたのは市民の責任感と積極的な参加姿勢、行政との協働であることを論じた。 |
| 人口減少都市の縮小計画 | 単著 | 2007.9 | ビオシティ no.37 |  | 総7頁 | 旧東ドイツにおける人口減少都市がどのような将来の計画を策定しているのか、そのような都市の縮小計画を整理した。 |
| コンパクト・シティ再考— | 単著 | 2007.4 | ビオシティ no.36 |  | 総6頁 | ヨーロッパ型のコンパクト・シティが注目されているが、日本の都市は既にコンパクトであることを論じ、コンパクト・シティよりもリニア・シティの方が有効性が高いのではないか、と提案する。 |
| クリチバから学ぶもの | 単著 | 2006.9 | 地方自治職員研修 |  | 20-23頁 | ブラジルのクリチバから何を学ことができるのか。しっかりと継続した都市行政をすることの重要性、市民を参画させて、行政を信頼してもらうことの重要性などを論じた。 |
| 人口縮小時代の都市政策 | 単著 | 2006.8 | 週間エコノミスト2006.8.15/22合併号 |  | 56-59頁 | 人口縮小時代においては、どのような都市政策が必要となるのか。人口縮小していくと、人口が減ることよりも人口密度が低減することの方がより行政としては深刻な課題になることを論じる。 |
| 持続可能性を維持できる地域社会について | 単著 | 2006.3 | 21世紀ひょうご　vol.94 |  | 総11頁 | 地域社会の持続可能性を維持するためには、何をするべきか。地域の自立性を高めることの重要性と、そのためには地域アイデンティティを強化することが必要であると論じる。 |
| Shifting Lenses: Examining a Field Study Studio with Different Cultural Perspective | 単著 | 2006.2 | 経済研究　第135号　明治学院大学経済学会 |  | 105-120頁 | This paper analyzes the importance and the value of conducting a field study studio in a different cultural setting. Author’s experience in Curitiba, Brazil is provided as a case study. |
| シュリンキング・シティーがもたらすこと | 単著 | 2005.10 | 商店建築 |  | 67頁 | 旧東ドイツの縮小都市がどのような問題を生じているのかを整理し、その対策の難しさを論じた。 |
| 環境・交通・福祉・土地利用計画を統合した街づくり−クリチバ | 単著 | 2005.Autumn | approach  竹中工務店 |  | 6-9頁 | 人間都市として知られるクリチバの都市政策の特徴を整理した。 |
| 都市開発　景観法のインパクトとは | 単著 | 2005.8 | 商店建築 |  | 79頁 | 新しくつくられた景観法がどのような影響を与えているのか。また、その問題点は何か、ということについて論じた。 |
| 都市の魅力を喪失させる最も簡単な方法 | 単著 | 2005.6 | 商店建築 |  | 71頁 | 都市の魅力を喪失させるためには、大きな道路を整備するのが最も手っ取り早いということを論じた。 |
| 環境と共生する住まい、コミュニティづくり | 単著 | 2005.6 | Nature Interface |  | 32-35頁 | 世界において最先端的な環境共生型コミュニティを紹介した。 |
| サンフランシスコ大都市圏における広域地域計画策定の問題の整理 | 単著 | 2005.3 | 経済研究　第132号　明治学院大学経済学会 |  | 53-63頁 | サンフランシスコ大都市圏において、なぜポートランドやミネアポリスのような広域地域計画が策定できないのか。その難しさはカリフォルニア州のホーム・ルールにあるという仮説を立て、それを取材調査、文献調査から明らかにした。 |
| 「米国大都市圏計画制度の経緯と背景にある政策意図の分析」 | 単著 | 2004.7 | （財）計量計画研究所 |  | 総235頁 | アメリカの大都市圏は大きな変革期にある。それは大都市圏の再構築という変革であり、それを促進させているのは、経済のグローバリゼーション、社会不平等の拡大、環境問題の深刻化である。  　本論文は、そのような大きな変革期にあるアメリカの大都市圏を、いくつかの事例研究を遂行することで分析、その背景にある政策意図を理解しようとすることを目的としたものである。事例研究をした対象大都市圏は、デンバー、アルバカーキー、サンフランシスコ、ロスアンジェルス、サンディエゴ、ミネアポリス、シカゴである。 |
| 「米国で始まった郊外の再生」 | 単著 | 2003.8 | Future of Rear Esatate,2003 Autumn |  | 総4頁 | アメリカにおいて、衰退しつつある郊外の梃子入れ的な政策を中心に整理し、郊外を再生させることの重要性を論じた。 |
| 「法律22号(1992)、法律25号(1999)がインドネシアの空間計画に及ぼす影響・変化に関する考察と整理」 | 単著 | 2003.5 | 経済研究　第127号　明治学院大学経済学会 |  | 51-63頁  ※研究ノート | 東南アジアの国々の多くは、1990年代にそれまでの中央集権的な行政システムから地方分権化的なものへと転換を図っている。特にインドネシアは、1999年に地方分権化２法といわれる法律22号と法律25号を制定し、法的根拠が確立されたこともあり、地方分権化が強力に進められている。本論文は、この法律が制定されてからの３年間で計画の策定、実施面でどのような変化が見られるようになったか。そして、またそのことによって生じた課題と影響に関して、特に空間計画の位置づけに着目することによって考察し、整理したものである。 |
| 「都市＋デザインの動き（海外事例：アメリカ）」 | 単著 | 2003.6 | 都市＋デザイン  19号 |  | 52-56頁 | アメリカにおける最新の都市デザイン事例を紹介する。そのポイントは自動車を苛めて、人を中心とした空間づくりである。 |
| 世界の環境都市に学ぶ-4 「環境問題は哲学の欠陥」を示唆 | 単著 | 2003.4 | 連合　2003.4 |  | 28-29頁 | 世界の環境都市シリーズ。テネシー州のチャタヌーガなどを事例として紹介しつつ、環境都市を推進させていくには技術よりも哲学が必要であることを論じる。 |
| 世界の環境都市に学ぶ-3 行政の後押しで広域行政が成長管理 | 単著 | 2003.3 | 連合　2003.3 |  | 28-29頁 | 世界の環境都市シリーズ。オレゴン州のポートランド市の成長管理政策を紹介する。 |
| 世界の環境都市に学ぶ-2 すでに100年前から、環境低負荷！ | 単著 | 2003.2 | 連合　2003.2 |  | 28-29頁 | 世界の環境都市シリーズ。20世紀初頭につくられたイギリスのレッチワース。その環境共生的な計画思想について整理した。 |
| 世界の環境都市に学ぶ-1 お金はなくても、ここまでやれる！ | 単著 | 2003.1 | 連合　2003.1 |  | 28-29頁 | 世界の環境都市シリーズ。インドのラクナウの有機廃棄物のリサイクル・システムを紹介する。 |
| 成熟社会における都市の針路 | 単著 | 2003.2 | 建築整備士　2003.2 |  | 47-51頁 | 都市が成熟化していく中、環境負荷を低減させた都市計画、まちづくりが必要であることを論じた。 |
| 「英仏のニュータウンの動向に関する調査」 | 共同執筆 | 2002.3 | 都市基盤整備公団総合研究所 | 吉村哲哉 | 総214頁 | イギリスおよびフランスにおけるニュータウンの開発経緯そして運営実態、そして運営に関わる課題を取材調査を中心として抽出し、今後の我が国のニュータウンの運営等に関しての方向性を考えるうえでの検討項目を整理する。 |
| Mercosur Experience in Regional Freight Transport Development | 共著 | 2002.3 | Japan Bank for International Cooperation Research Paper No.13 | Shinichi Kobayashi, Chuong Phung, et al. | 総96頁  (53頁) | アルゼンチン、ブラジル、パラグアイ、ウルグアイ、チリ、ボリビアから構成されるメルコスール諸国の物流統合の可能性、そしてそれを実現するうえでの課題を検証した。手法は各国の行政担当者と物流企業へのインタビュー調査および文献調査とからなる。 |
| 英国のエコシティー  持続可能な暮らしを人々に提案する環境共生住宅 | 単著 | 2002.3 | 月刊 環境自治体　2002.3 |  | 34-37頁 | イギリスにおいて環境政策に力を入れているレスター市に取材をし、特に環境共生型住宅の普及に関する政策を中心にまとめる。 |
| 英国のエコシティー　環境対応技術のテーマパーク | 単著 | 2002.1 | 月刊 環境自治体　2002.1 |  | 42-45頁 | 環境型テーマパークであるCAT（Center for Alternative Technology）の概要を、取材調査をもとに整理した。 |
| 森林を保全として「風の道」をつくったシュトゥッツガルト市 | 単著 | 2001.12 | 森林都市　No.33 |  | 35-38頁 | 都市計画的手法を用いて風が流れる「風の道」を整備し、盆地内の汚染された大気を追い出すことに成功したシュツットガルト市の政策を取材をもとに整理した。 |
| 環境共生型建築の歩みと展望 | 単著 | 2001.10 | 建築整備士2001.10 |  | 48-52頁 | 環境共生型の建築が発展してきた背景を、おもにアメリカの流れを中心に整理した。 |
| 環境配慮と経済性を両立させたニューヨークのオフィスビル「オーデュボン・ハウス」 | 単著 | 2000.8 | 月刊 環境自治体　2000.8 |  | 46-49頁 | 環境建築として先駆的な事例であるオーデュボン・ハウスに取材して、その特徴、課題とメリット等を整理した。 |
| ソフトな政策で環境負荷の少ない建物の普及に成功したオースティン市 | 単著 | 2000.7 | 月刊 環境自治体　2000.7 |  | 42-45頁 | テキサス州のオースティン市のソフト面（環境負荷の低い建物を普及させるための補助金制度等）から整理した。 |
| 「就労構造変化とまちづくりに関する調査検討」 | 共同執筆 | 2000.3 | 都市基盤整備公団総合研究所 | 吉村哲哉 | 総189頁 | 少子・高齢化が進展し今後の人口減少が見込まれるなかで、就業構造の変化が都市圏の都市構造にどのような影響を与えるかについて、産業、人口、生活及び空間の面から検討を行った。「職・職・住近接のまちづくり」や「SOHO型就業支援のまちづくり」などを提案した。この調査の結果は公団がプレス発表するなど、注目を浴びた。 |
| 「バブル崩壊前夜の熱狂的建設ラッシュ」 | 単著 | 1997.8 | 週間エコノミスト1997.8.5 |  | 総3頁 | アジア・バブルの崩壊を、実態経済のない投機的行為がブレーキの効かない状況を報告し、予言した（予言は見事当たる）。 |
| 「新形態商業施設の未来」(上)（下） | 単著 | 1992.11-12 | 週間エコノミスト1992.11.24-12.1 |  | 総8頁 | アメリカのフェスティバル・マーケットが高い集客力を誇っている背景を分析し、体験型商業の重要性を論じた。 |
| 「コミュニケーションが地方を熱くする」 | 単著 | 1991.7 | 週間エコノミスト1991.7.2 |  | 総4頁 | 地方の再生において、地域間連携の重要性を論じた。 |